

# 児童養護施設における養育の質的向上に関する理論的・実践的研究 ～職員の安心感の形成と相互支援体制の構築のための研修プログラムの開発～

新川貴紀 小野しのぶ 斉藤晋  
(北翔大学) (光が丘学園) (ふくじゅ園)

## <要 旨>

本研究では児童養護施設職員がその勤務経験の中でどのようなことを考えていたかを調査し、それらを施設職員の研修に生かすことを目的としたものである。インタビュー調査を行う前に、第一著者（私）がボランティアとして様々な形で施設に関わり、その後施設職員3名とボランティアとして共に施設に関わった大学院生へのインタビューを実施した。その際に調査者としての「私」があらかじめ持っていた「構え」を批判的に検討することで、インタビューイの語りを整理した。その結果「児童との関係性」「児童の理解と対応」「他職員との関係性」についての施設職員の語りは「私」私の構えを崩すものであり、さらに「自分自身のとらえ方」がそれぞれに関連していることが示唆された。そして「自分自身のとらえ方」が他職員との協働関係に密接に関連していること、協働関係を重視し他職員の視点を取り入れることが、養育の質的向上に有効であることが考察された。また、これらを今後どのように職員に提示していくかが今後の課題として挙げられた。

## <キーワード> 児童養護施設 児童の理解と対応 協働関係 自己評価

### 【はじめに】

近年、児童養護施設に措置入所する児童の抱える問題が複雑で難しいものとなっている。施設職員には児童に対する的確な理解が求められるが、それ以前に児童を理解しようという姿勢が常に求められる。本研究においては児童養護施設で児童と関わるという営みの中でそれぞれの経験の中で何を感じ、そしてそれらがどのように変化していったのか、また職員が何によって支えられてきたのかを調査し、それらをまとめ提示する事により、これから施設で働くとする職員の将来への指針となる事を目的とするものである。

村瀬・田中・青木（2008）が指摘するように児童養護施設職員がどのように研修し、どのように資質を向上させるかという問題は議論される必要があると思われる。児童養護施設職員に求められる研修体系については川上（2006）がまとめている。そして各施設ではそのような研修体系を参考に独自に研修を行っていくことが期待されている。施設の独自の研修ではケース検討や特定の援助技術の習得

のために外部講師を招いての研修が行われているようである。

そしてそのような研修の重要性は否定されるべきものではないと思われる。しかし同時にこれから施設で働こうという新人職員にとっては、施設で働くことで自分自身がどのように変化していくのかということを知るということも、見通しを持ち現在の自分の置かれている状況を客観的にとらえ、自分自身の成長を考える際に重要ではないだろうか。

では次にどのようにその職員の変化を明らかにし、提示していくのかという問題がある。当然丁寧に聞き取って行く必要があるが、同時にこのような調査を行う際に重要な問題は「調査するわたし」に関するものである。好井（2004）が指摘するように調査する営みにおいて「わたし」がその過程の中で消え去ったり、無色透明な存在になることなどありえないし、あえて無理をして、強引に「わたし」を消し去る必要などないと考える。したがって本研究では第一著者（以下、私）が以前に非常勤の心理療法担当職員として勤務していた経験や研究

者として児童養護施設というフィールドに入り、児童や施設職員との関わりの中で感じた事や、その変化についても積極的に取り上げる。

つまり調査者がどのような「構え」を持っており、それがどのように変化していったかについて取り上げる必要があると思われる。桜井(2002)は調査者はインタビューに際して常に一定の「構え」を持っており、その「構え」に照らして、そこから逸脱する対象者の語りを抑圧する傾向があると述べている。そして私たちは調査の「構え」から自由になることはできない以上、それについて自覚的であるべきだという。

そして同時に調査の対象となる人々が私自身をどのように捉えるのかということも重要な問題である。インタビューをする前のラポールの重要性は指摘されることが多いが、どのようにラポールを作るのか、そしてラポールができたことをどのように判断するかということは研究者ならびに研究論文の読み手にとって難しい問題である。

そこで私自身を「フィールドワークの道具」(桜井、2002)として積極的に位置づけることによって、私がどのようにフィールドに入っていくのかを提示し、インタビューを通して私の「構え」がどのように変化していったのかについて考察していくことも重要であると思われる。

このようなことから本研究で用いるアプローチは対象者の語りから客観的なデータを取り出そうとする、実証主義的アプローチではなく、インタビューという相互行為自体が調査者と対象者の共同作業によって組み立てられているという「対話的構築主義アプローチ」である(桜井、2002)。

### 【方法】

2008年5月より北海道内の児童養護施設F園に私が関わり始める。まずは秋の園内祭の手伝いのため所属する大学の学生、大学院生を連れ1週間ほど園内祭の準備と当日の運営を行った。その後も、園の行事(登山やスキー遠足)などに学生とともにボランティアとして参加した。2009年11月からは中学生の高校受験対策のため、週一回の学習指導を大学院生4名と共に参加した。3月の試験までの16回にわたり私も一人の児童を担当し継続的に関わった。大学院生は児童との関わりについての記録をまとめ、施設職員に書面でコメントをもらうという作業を繰り返した。この時点ではインタビュー調査を行うことを施設側には伝えてはい

なかった。

2010年4月に大学院生2名に対し、児童や施設との関わりに関するインタビューを行った。また施設職員3名に対してもこれまでの施設勤務経験に関するインタビューを行った。インタビュー内容は「児童との関わりが勤務し始めた頃からどのように変わっていったと感じるか」、また「何が施設勤務という経験を支えていたのか」などについてであった。インタビューは大学院生は大学内において、施設職員は施設の応接室で行った。インタビュー時間は約一時間であった。

インタビューは、大学院生は児童との関わり記録の中で、児童や施設との関わりについての悩みについて意識的に記録していた男女それぞれ1名(Aさん、Bさん)とした。施設職員に関しては児童養護施設勤務30年を超える女性職員(Cさん)と勤務20年を超える男性の副施設長(Dさん)、ならびに勤務5年未満の女性職員(Eさん)とした。Cさんに関してはF園のみに継続勤務する主任保育士であり、私たちがボランティアとして関わる際にもいつも笑顔であたたかく迎え入れてくださった方であった。Dさんは他施設から移られ、2008年度途中から副施設長となった方で施設長の交代があった施設を支えてこられた方である。Eさんは勤務2年目にその対応で施設全体が揺れ動いた児童を担当されていた方であった。

### 【結果と考察】

児童との関係性、児童の理解と対応、他職員との関係性という3つの要因別にインタビューの結果をまとめ考察する。

私が調査開始時に持っていた「構え」は、児童との関係性については、関係を作るためのコツのようなものがあり、それを意識できるようになり、続けることができるようになるという変化があると考えていた。また児童の理解と対応に関しても、児童に関するさまざまな専門的な知識を身につけることに比例し、児童の理解の深まりや効果的な対応が可能になり、職員の自己評価も高まるものと考えていた。さらに他職員との関係性とは経験のある職員が若い職員を援助していくという、一方向的なものであると考えていた。

非常勤職員として限られた時間のみ、児童養護施設に関わってきた経験や児童養護施設職員への研修プログラムなどの例などを見ることを通して作られた調査者である私の「構え」は全体として漠然としており、具体性を持っているとはいえないものであった。

これらの「構え」は施設と関わりをもち、職員とのインタビューを行うことで変化していった。また、大学院生のインタビューをすることで、私の「構え」が形成されていった過程が思い起こされる結果となった。これ以降はその過程について要因別に示した。

### 児童との関係性

大学院生は児童との関係を保つことに注意を払っていた。関係が崩れることを恐れ、自分たちの発言にも気を付けており、それが児童への対応上への迷いとなっていた。しかし、Aさんは学習指導の期間が終了した際に、児童が残念そうな様子を見せたことについて「正直嬉しかった」と語り、関係を築くことに多くの意識を使っていたことが報われたことに喜びを感じているようであった。

私自身も心理療法担当として限られた時間の児童との関わりの中で児童との関係性を作る事に注意してきたため、大学院生の語りは私の「構え」一致するものであった。しかし施設職員の語りは私の「構え」崩すものであった。施設職員は児童との関係性は自然とできるものとする傾向があり関係性が崩れることへの不安を感じていないようであった。またEさんに大学院生の傾向を伝えると驚いた様子で、児童は自分たちのために時間を作られたことだけでもうれしいのではと語った。Eさんも勤務しはじめの頃は児童に「なめられてはいけない」ということを考えていたとのことであったが、数年たった現在ではそのような関係性に関する不安は感じていないようだった。児童の立場に立ち、大人が関わりを持つことを嬉しく思うだろうと考えるようである。

またDさんは「一通り仕事を覚えてきた時期に、なかなか子どもから結果というものは感じがたいものですが、関係性というのはすごく感じることができる。ある程度の関係ができてきた。」と語っている。これらのように児童に何らかの対応をした際に、それらが結果として現れると言うことに関しては難しいにしても、関係性というものは作る事ができると考えるようになり、それらに伴う不安などを感じることは少なくなるというのである。

そしてそれは児童養護施設に入ってくる児童の特徴であるようであった。Dさんはその児童の特徴を「施設の中の担当と子どもの関係は、ちょっと表現的によくはないのですが、虐待を受けた子どものように、捨てないで感覚があると思います。捨てられる感覚。担当というのは、どうしても自分にとってこの人がいないとま

ずい存在なんですよ。」と語っている。

もちろんそのように児童との関係性をとらえられるようになるまでに職員間で多少の時間の差はあるだろう。またそれらは関係を作るための試行錯誤の結果である可能性も考えられる。しかしその後はあまり意識されずに、時間の経過と共に児童との関係は築くことができるととらえる傾向があるものと思われる。

### 児童の理解と対応

児童の理解と対応について大学院生は試行錯誤を行う中でも迷いが消えなかった。これは学習指導という限られた時間の関わりの中では当然であると思われる。また、必要なサポートとしては、児童に関する情報を十分に与えられることとしていた。大学院生は児童に関する最低限の情報は学習指導開始前に与えられていたが、さらに詳細な情報を与えられることで、これまで得た知識と照合し、適切な理解と対応を目指したいという考えが現れたものであると思われる。

しかし、実際はどれだけ情報があっても必ずしも完璧な児童の理解や対応ができるものではないと思われる。施設職員はその中でも試行錯誤しながら児童の理解と対応を行ってきた様子を語っていた。Eさんは勤務しはじめの頃を振り返り、児童の対応に困った際には、先輩職員に対応してもらいその様子を見ることでさまざまなことを学び、自分自身でも日常の中でさまざまな工夫を行ってきた様子「いろいろな他の先生に入ってもらったり、一歩引いて見ていると、こんなかわり方もあるんだとか、あとは、あのときは言い過ぎたかなとか、自分は大人げなかったかなとか、いつも振り返るようにしました。(略)」と語っている。

またCさんやDさんも同様に見て学ぶ、ということの重要性を指摘しており、Dさんも「すし屋とか大工みたいな、見て覚えろみたいな、そういう雰囲気が、やはり私の代はまだまだ強かったです。」語っている。

児童の理解や対応というものは、あらかじめある情報や理論から演繹的に考え実行していくというものだけではなく、他の職員の対応を観察し、そこで考えたことを自分自身で試すなど、帰納的に考えて実行していくものでもあるといことを表している語りであるように思われる。

またDさんは児童との関係性の部分で取り上げたように「一通り仕事を覚えてきた時期に、なかなか子どもから結果というものは感じがたいものですが、関係性というのはすごく感じ

ることができる。ある程度の関係ができてきた。」と語った。児童との関係性と違い、児童に対応した結果というものはすぐに現れるものでもなければ、はっきりと目に見える形のものというものは少ないという可能性が考えられる。そのような状況の中で、養育という営みを続けていかなければならない施設職員はどのように考えるのであろうかという疑問が沸いた。私は短期間の勤務であったため、その時にはこの先、経験を積んでいけば児童の理解や対応というものはかなりの程度できるようになり、結果としてそれを感じることができるのではないかという期待を持っていた。それが私の「構え」としてインタビューに影響していただろう。しかし、Dさんの「結果というものは感じたい」という語りは私の「構え」を崩すものであった。

また児童の理解や対応というものは児童のみを切り離してとらえるのみではないということが職員の語りからは考えさせられた。Eさんは勤務経験の中で「自分のやってきたことを自分の中で肯定しないと、今までやってきたことがなんだったんだろうと思ひそうだし、できることはやってきたつもりなので、そこは自分をほめてあげないと」と語り、自分自身を評価することで現状を維持しているように伺えた。

このようなEさんの語りは私自身が持つ「構え」の背後にあるものと一致すると気づかされた。児童の理解と対応がより適切なものへと変化していくという考えを持っている場合、現在の自分自身の状態をある部分では肯定することにより、より成長していく自分をイメージできるのではないだろうか。そしてそれは無意識のうちに自分自身で評価を行っているということに繋がっていくのではないだろうか。

しかしDさんの語りを聞くことで、児童の理解と対応に関して自分を評価することには次の段階があることがわかる。Dさんは現在は児童への対応は経験を積みばある程度できるものと見え、天職のように考えていた時期があったと語った。そしてDさんが入院し施設を離れた経験を機に、これまで自分自身がうまくできていると考えていた対応も、自分以外の職員でも同じように動けるということを実感し、今までの自分への評価を「なんておごった考えだったんだ」と振り返ったと語った。また「自分に合っているとか、合っていないとかそういうのは自分で評価するものではない」とし、そのことをきっかけに「大きな声をださなくなった」など児童への対応も変化したと語った。

このことは児童の理解や対応というものは、

児童だけを切り離して理解し、その児童に対応するというものではなく、関わる職員自身の自己評価などが密接に関係してくるということを表していると思われる。職員が自分自身の評価を変化させること、つまりは自分自身の成果や能力に注意が向いていたところから、そこを意識的に離れて児童の理解と対応を考えるようになるということではないだろうか。

自分自身の考えをEさんのように振り返って客観的にとらえることができるようになるということ、そしてその状態を過ぎて対応を変化させたDさんの語りから、児童の理解や対応を自分自身に評価などに無意識に関係付けてしまうという難しさと、そこを離れることの重要性を感じた。

そのように考えると大学院生の持つ不安も、理解や対応の質を向上させるために外的な情報に依存し、目の前の事実にも忠実に考えるということに阻害しているようにも捉えられるのではないだろうか。職員の語りとは違い自己評価が低い状態であるが、同様に自分の状態を客観的に見ることができるとも必要とされるだろう。

#### 他職員との関係性

他職員との関係性については、大学院生は施設職員との書類上のやりとりだけではなく、自分自身の悩みや迷いを共有し、アドバイスをもらえる時間を作りたかったと語った。同時に他の大学院生の記録を読むことで、自分自身以外の考えを知ることができたことが良かったとも語った。

大学院生は実際に児童養護施設に勤務しているものではないが、施設で児童とかわる際に同僚や経験のある先輩に何を求めるかというところでは一致すると思われる。大学院生がアドバイスをもらいたかったと語ったことに関しては、より経験があるものが、経験の浅いものに対して援助することがチームとして子どもを見ていく際に重要であるという考えは、私の「構え」に合致したものであった。

しかし職員の語りからは、このような経験の浅いものが不安や迷いをもち、それを解消するためという一方向的な職員間の関係性は一部に過ぎないということ、さらには不安などを含む感情が職員同士の関係性に影響を与えるということを考えるきっかけとなった。

Eさんは先輩職員からのサポートを実感し、恵まれた職場にいるとしながらも、自分自身の担当児童に関する問題が施設で議論された際に先輩職員より「がんばって」と言われた経験

を自分ががんばっていないと思われたのではないかと捉え、否定的な感情が沸いたことがあったと語った。

このことは児童の理解と対応の部分とりあげた E さんの語りと関連し、自分自身が大変な状況でも何とかやっていると考えたいという思いからきていると思われる。また同時に E さんはこのときの状況を振り返って「何かいろいろあることがあの日は、1日ごとに何かは繰り返し広げられて、自分の感覚や自分の置かれている立場などが何か麻痺していて、あまり状況が読めてなかったんだろうなと思っています。でも、あとになって考えてみると、あまり体験しないことをしたなと思っています。」と語っている。

このことも職員の状態が他職員との関係性に影響を与えることを示していると考えられる。職員が自分自身をどう捉えるかによって他の職員の位置づけも変わってくるのである。

そのことを示すように D さんは入院を経験し、自分自身の自己評価を「なんておごった考えなんだ」と認識したことを機に個人ではなく組織として子どもを支えることの大切さを実感したと語っている。

また C さんは児童には常に振り回されてきたと語り、他職員との関係性について次のように語った。

「私がやれたのは、子どもといるのが楽しいとか、もちろんありますけれども、たぶんそこよりも職員がいたというか、みんな代わりましたけれども、たぶん職員と一緒にやれたことのほうが大きいかないという気はします。それはいろいろ大変なこともありましたけれども、本当に助けてもらうことのほうが、年数だけ長いので、本当に嫌なんですけれども、みんなに助けてもらったりしたことのほうが多いので、それで本当に楽しく、子どもとの楽しさということはもちろんですが、たぶん職員と、こういういろいろな人とのほうが楽しかったから、いられたのかなという気はしますね。それくらい助けてもらっています、今でも。」

この C さんの語りは私の「構え」を大きく崩すものであり、経験のあるものから経験の浅いものへという一方向的な関係性だけではない、職員間の関係性も重要であることを示している。

同様に大学院生も、共に児童と関わっている大学院生のまとめた記録を見ることも意味があったと語っていたことに関して、他の職員

との関係性一方向的ではないものを表していると思われる。

このように経験のある職員も経験の浅いものも自分の経験のみを意味のあるものとして捉えない姿勢は、仕事の楽しさややりがいと繋がることを示唆しているように思われる。

### 自分自身をどう捉えるか

ここまで3つの要因に整理し、大学院生の短期間での変化や、職員の変化を見てきたが、どの要因も子どもと関わる大人がどのような状態であるか、そしてそれをどう捉えるかが関連しているように思える。

すべての大人が子どもと関わる際に同じような変化をするとは限らないが、それらに関わる要因としての「自分自身の捉え方」というのは共通するように思える。E さんは自分の状態を「麻痺」というように表現し、現在はそこから抜けている。また D さんも入院経験を機に評価は自分でするものではないととらえるようになったとしている。

最後に再び C さんについて取り上げる。C さんは私や大学院生が外部のものとして関わらせていただく際にも常に笑顔でいろいろな気を遣ってくださる方であり、子どもとの関わりも我々に対して行うものと同じように一貫しているように見えた。私にはフィールドワークの中で C さんは子どもからも職員からも慕われる存在のように見えていた。そこで C さんの30年を超える経験の中でどのように今の C さんとなっていったのかについて非常に興味を持った。つまり私が持っていた構えのように、紆余曲折がありながらも徐々に自信をつけて、現在の状態があるのではないかと考えたのである。しかし C さんから語られる内容は非常に謙虚なものであった。私は自分の構えに合うような答えを引き出そうとしていたのだろう。そのため C さんが謙虚であるように感じられることを漏らす。その際にも「違うんです。先生は私の実態がわからないから、本当にだめなんです。」と私の想定していた語りは得られなかった。

しかしインタビューをしているうちに C さんが現在のようなあり方のまま30年以上の勤務を続けてこられたからこそ、現在の C さんがあるのではないかと思えるようになっていた。

そしてインタビューの最後に「これから入ってくる方とか、若い職員さんとかに伝えたいことは」という問いに対して C さんは体の丈夫さを挙げた。そしてその後、児童との関係性や

児童の理解と対応、他職員との関係性などの要因をまとめるような形で次のように語った。

「確実に子どもとは衝突はありますし、どんなによくして、こういうふうにして考えて提供しても、全然それが受け入れられないことも出てくるだろうし、(中略)、でも、養護というのはそんな子が入ってくるんですから。普通の子であれば、全然あれですけれども、そうやってぐちゃぐちゃになって入ってくるのが当たり前の子どもたちですから、それに対応するには、いろいろ思っても、まともには返ってこないことがたくさんある。

そんなときに、どうする、これとか言える人とか、何、これとかと言って、解決はしなくても、また明日だとか、そういうふうにしてやる。あまりいい解決ではないのかもしれないんですけども、また明日から頑張るやるとなるかしらと思うので、そんなことが言える関係づくりとか、そういう人を見つけるとか、その人とどうのだけではなくて、その雰囲気とか、仕事は大変だけれども、楽しいというのは、やっぱり仲間であったり、そこでいろいろ愚痴も何でも、ただただおしゃべりでもできて、じゃあ、ご苦労さんと帰って、またとなるのかなと思うんですけど、それだけではたぶんうまくはいかないんでしょうね。ちゃんとしたものがきちんとないとだめなんですよけれども。」

Cさんは自分自身の考えを「ちゃんとしたもの」とは捉えていないとしながらも、児童との衝突は避けられないものとして受け入れること、児童の理解や対応に関しては個人の見方だけでは限界もあるということ、そして職員同士の関係性が施設で働いていく上でいかに重要なものであるかを語っていると思われる。そしてCさんのあり方は、さまざまな視点で児童を見ていくこと、職員が上下の関係を越えて支えあい助けあっていることが重要であると言うことを、その行動を持って示されているように感じられた。

そしてその背景にはCさんの自分自身に対する捉え方が一貫しているためであろうと思われる。

#### 【総合考察】

ここで私が行ってきたことは、調査者である私を調査の道具として使いながら、私が調査の前提として持っていた「構え」を、調査インタビューの語りと照らし合わせて自己言及的に

批判したことである。

私自身は非常勤の心理療法担当職員として勤務していた際には、自分の力で児童に肯定的な変化を起こしたいという思いが強かったとインタビューの過程で気づかされた。Eさんの「がんばって」という言葉の捉え方に関しても、私も同じような状況であれば同様に捉えていただろう。しかしEさんが「麻痺」と表現するように、この状態は広い視野を持ち主体的に物事を考えられる状態とは異なるものと思われる。

さらに現在調査者として外部から児童養護施設に関わり、大学院生や施設職員の語りを聞いたことにより、「麻痺」した状態にあるということは協働関係の形成を阻害する危険があるのではないかと考えるようになった。

養育の質の向上のためには、的確な児童の理解を追求することはもちろん必要なことであるが、個人の能力には限界があることも知り、他職員との良好なチームワークの上で個人が安定を保ち、他職員の視点も取り入れながら養育というものを捉えていくことが重要であると考える。

このように職員同士の関係性を重視する姿勢は、全国社会福祉協議会(2009)の調査結果でまとめられているように、児童が他者同士の間に協働関係が成り立つことをまのあたりに経験することは、家族関係の不調から信頼の感覚を損なっている子どもたちにとり、「他人ですら信頼・協調関係が持ち得るのだ」、「人は信じ合えるのだ」という、信頼感再生の契機となると思われる。そして協働関係を作る以前個人が自分自身をどうとらえるかを考えることが重要であるだろう。

今日さまざまな分野においてその技術を科学的に捉えようという傾向が見られる。しかし科学性を重視する傾向は、物事をできる限り抽象化し、マニュアル化する傾向に繋がっているように感じられる。マニュアル化することは短期間で効率的に技術を習得できるという効果があるようにも思われるが、抽象化したためにそぎ落とされる現実というものも必ず存在する。

対人援助の分野では科学から生まれた理論やマニュアルから演繹的に考えることも重要であるが、目の前にある事実から帰納的に考える姿勢を見につけることも重要なことであろう。

しかしマニュアルのみを重視してしまうことにより帰納的な考えを阻害してしまう危険性があると思われる。そしてそのような危険は

科学の捉え方が客観主義的なものに偏ってしまっていることから起こるのではないだろうか。

池田（1998）は彼の科学論と多元主義が強い親和性を持っていることを指摘している。今回の調査で示されたように、他職員との関係性を重視することはその様子を見せることで一定の効果があることはもちろんであるが、他職員と積極的にかかわり、さまざまな見方を自分自身の中に取り入れることで他の考えを排除しない姿勢を身につけ、その結果として多角的に児童を捉えるということに繋がるのではないだろうか。そしてそのような見方から生まれた児童のケアこそがより科学的なものであるのではないだろうか。

今回の結果は研修のためのプログラムを作成し、その効果を検討するということをしていない。今回得られた結果をどのように施設職員に提示し、効果をどのように測定するのかについては今後の課題である。また今後はより幅広い経験年数の職員への聞き取りを重ねる必要もあるだろう。

しかし今回の結果を新たに児童養護施設で働いていく職員が知ること、またそのような語りを先輩職員から聞くことは、施設内で相互支援体制を整え、養育の質的向上のために有用であると思われる。

#### 【引用文献】

- 池田清彦（1998）．構造主義科学論の冒険 講談社．
- 川上英一郎（2006）．児童養護施設職員に求められる研修体系 児童養護 36(3) pp.20-23.
- 村瀬嘉代子・田中康雄・青木省三（2008）．社会的養護と心の居場所 こころの科学 137 pp.66-79.
- 桜井厚（2002）．インタビューの社会学 せりか書房．
- 好井裕明（2004）．「調査するわたし」というテーマ 好井裕明・三浦耕吉郎（編） 社会学的フィールドワーク 世界思想社 pp.2-32.